
みかんの数え歌

三沢緋夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みかんの数え歌

【Zコード】

Z5226A

【作者名】

三沢緋夏

【あらすじ】

あいつの思いつきで始まった肝試し。全てはそこから始まつたんだ。

ひとつやふたつはいいけれど

だから嫌だと言つたんだ。

そんなこと、したくないって言つたのに。

田の前に広がる漆黒の闇。

無音の世界。

第6感の告げた精一杯の警告を
無視した自分に後悔をする。

生を感じる恐怖心なんて捨てればよかつた。

あいつを蹴り殺しても振り切れればよかつたんだ。

漆黒の闇をかすかに照らす真っ赤な月。
いつもは田を細めて眺めるそれすらが
気持ち悪い。

にやりと笑んだ少女の顔。

「なあ、肝試しやんねえか？」

全ての事の発端。それがこいつの思い付きだった。

いいね、それ。と田を輝かせるそいつらだって今の俺にひとつちや悪魔。

真夏の蒸し暑さが嫌になつてか。

それともただの興味本位か。

「な、来るよな？」

首を振つた俺の肩を掴んでにっこり笑う。手には中毒になつてゐる火のついたタバコ。

否を唱えることは許されず

非難の言葉を唱えることも許されず

肯定の意をもつづなずき。

みつつミカンを食べ過ぎて

俺の住んでゐる村には高くそびえる山がある。

その山には、決して入つてはいけないと祖母に何度も言われた。村人は死んだらそこに行くと、昔から言われ続けてゐるからだ。だが、山の精に拒まれた奴は山に入ることはできずに、ふもとの雑木林でうろうろするしかない。

例えばそれは罪人であつたり親より先に死んだ人だつたりだ。

親より先に死ぬことほど親不孝なことはない、と。

親が死に、迎えに来てくれた者だけが一緒に山に登れるとも聞いたが。

だから怨念を抱いているよくないものが多いから、と。

とにかく俺たちはその山のふもとの雑木林にいつた。先頭を威張りきつて歩いてゐるのはこんな企画をたてたあいつだ。俺は最後尾をトボトボ歩いてゐる。

雑木林にある小屋。

そこに一泊する。

それが今回の肝試しだ。

村で言われ続けてることを証明するために。

「あつた。小屋だ」

よつよつ夜中に腹下し

小屋は思ったより広かつた。

中に入りドアを閉めると真っ暗で、あいつの持ってきていた懐中電灯だけが唯一の光だつた。

それを囲むようにして俺たち5人は座り込む。

「なんか薄気味悪いな、やっぱ」

うつむきながら、あいつは言った。

そんなこと言うんなら最初からしなければいいのに」と
しーんとした状態が続く。

聞こえてくるのは風の音と、小屋のきしむ音。

それから俺の鼓動。

こつこつものお医者さん

突然連中の一人が頭を抱えてうずくまつた。

「頭・・・いてえ・・・」

その後ろで笑っている、いるはずのないモノ。

見えなければよかつたのに。

見えてしまわなければよかつたのに。

恐怖で心臓につめを立てられているようだ。

「か・・・帰ろつか・・・」

恐る恐る言つたあいつの目にも、何かが見えていたのだろうか。

突然、あいつは小屋から飛び出した。

それに続くように、俺も、他の連中も小屋から逃げ出す。

途中で頭痛を訴えた奴が崩れたが誰も足を止めない。

むつつ迎えの看護婦さん

先頭を走っていたあいつがいきなり座り込んだ。

震えを止めようともせずにガチガチ鳴る口でつぶやく。

「も、もう・・・帰れない・・・帰れない・・・帰れない・・・」

手には砕けた懐中電灯。

横にはお手玉で遊んでいる女の子。

ななつなかなか治らない

崩れるよつこしやがみこむ他の連中。

毒々しいほど赤い月だけがあたりを照らす。

女の子は楽しそうに歌う。

やつつやつぱり治らない

ザンと風が吹く。

舞う葉と砂から守るために、反射的に田をつぶる。

次にあけたときにはあいつらがいなくなっていることも知らずに。風が吹き荒れる。

何かを訴えるかのように吹き荒れる。

その強い風の中でもはつきりききたれる女子の声。

いいのついの子はもうだめだ

風がやむ。

目を開ける。

イマスグニゲナキヤ。ハシッテ。ハシッテ。ココカラデナキヤ。

全神経がそう命令を出してくるのに。

身体はぴくりとも動かない。

風がやんと、しんとなつた雑木林。
やがて感じる何かの気配。

視覚でも、聴覚でも、嗅覚でもない。

第六感の感じる気配。

だから嫌だと言つたんだ。

女子の声は脳に直接響く。

それに重ね合わせるよつに背後に迫る何かが唇を動かす。

とおでとうとう死んでしまった

(後書き)

ホラーを書くのは初めてなのでホラーになつたかどうか不安でいっぱいです・・・。
ホラーを読むのが苦手なので本当に思いつきでやってしまったみたいで、

感想、評価もらえると嬉しいです。エネルギーになります。
機会があればまた。三沢でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5226a/>

みかんの数え歌

2010年12月10日19時49分発行